

月刊

地域保健

11
2009

●特集

薬物汚染を
地域で防ぐ

●FACE2009

滋賀県立大学人間看護学部教授
堀井とよみさん



Face
2009



「考える保健師」を育てたい

保健師教育の大学院化と現任教育充実の両輪で

滋賀県立大学人間看護学部教授

堀井とよみさん

photographs : Sei Kamiyasu

今年の6月から社団法人日本看護協会の保健師職能理事に就任された堀井とよみ先生。甲賀郡（現・甲賀市）水口町の保健師時代には、認知症（当時は痴呆）高齢者のデイケアの設立をはじめ24時間在宅ケアシステムの立ち上げなど全国に先駆けた多くの優れた実績を残し、その活動は全国的に知られています。

35年間にわたる豊富な現場経験をもとに、現在は地元滋賀県立大学で教鞭をとりながら多忙な日々を送る堀井先生に、保健師教育や力量形成などについて伺いました。

活動の入り口は必ずしも「予防」ではない

水口町での認知症高齢者のデイケアや24時間在宅ケア創設のお話をお聞きします。

堀井 1981年でしたが、訪問先で扱いに困っている認知症の高齢者に出会ったことなどから訪問調査を始め、高齢者問題を地域の緊急課題と位置づけました。そのときに、初めは認知症の予防をやりたいかったです。でも、

いきなり予防を唱えても誰も振り向いてくれません。「それなら、住民の皆さんが一番心配していることの解消から」と始めたのが認知症高齢者のデイケアです。それがきっかけとなって、早期発見が大切との認識が住民のなかで高まり、軽度認知症チェックシートの開発などに結びつきました。

この経験があったので、寝たきり高齢者の問題でも、まず住民が安心できるシステムをつくりました。それが町立保健センター、訪問看護ステーション、在宅介護支援センター、社会福祉協議会のヘルパーステーションの連携

による24時間在宅ケアシステムです。システムができると、健康推進員さんのほうから「寝たきりにならないために私たちにできることはないか」と言い出してくれて、それが閉じこもり予防の「ミニサークル活動」へとつながっていきました。

このように最終的に公衆衛生看護の目的とするところにたどり着けば、入り口は「予防」でなくてもよいのです。私は公衆衛生看護を実践する保健師ですが、在宅看護の活動が目立ってしまったので、訪問看護師のなかには私のことを在宅看護の専門家と誤解される方もいらっしゃいました（笑）。

個別から全体までを包括的に見る、まさに保健師活動のお手本ですね。最近、気になるのは個別支援、特に困難事例への保健師の対応が鈍くなっているという印象があるのですが。

薬物汚染を地域で防ぐ



p16 「第3次薬物乱用防止5か年戦略」による違法薬物の需要削減への取り組み

厚生労働省医薬食品局 安田尚之

p24 薬物の種類・健康への影響についての基礎知識
薬物の乱用、依存、中毒の違いを理解することの重要性

国立精神・神経センター精神保健研究所 和田 清

p31 「野生大麻ゼロ作戦の日」新設で独自の展開

テレビ会議システムの活用を含め、広大な面積に対応する北海道の薬物乱用防止対策

保健福祉部保健医療局 歌川喜人

p36 素晴らしい明日のために薬物乱用者本人へ積極的なアプローチ

演劇による中学生への視覚的な啓発活動、国内初の薬物依存症対策事業を推進する栃木県

保健福祉部 金澤秀行

p44 増やしたい、「このポスター、知ってるよ!」の声

若い世代の心に届く薬物乱用防止啓発を目指す大阪府

健康医療部

p50 家族への支援を軸に関連機関との連携を推進

10年目を迎えた北九州市の取り組み

市立精神保健福祉センター 田村篤子

p56 茨城ダルク 今日一日ハウス 岩井喜代仁代表インタビュー

「間違えてほしくないのはここが乱用者ではなく、回復を目指す依存症者の施設であること」

取材・文 編集部

各自自治体の小学校から高校まで、地域保健・学校保健の連携により薬物に対する啓発活動が浸透する一方、大学生をはじめとする若年層の薬物汚染は拡大が続いている。

保健所、精神保健福祉センターなどで行われている薬物依存症者とその家族らに対する相談支援の場において、保健師の活躍に期待が寄せられているが、この課題が犯罪と隣接しており、2次予防が困難であることから、その方策に限界があるのも事実である。

地域のなかで、より効果的な薬物（再）乱用防止活動を実現させるために、行政の保健師が把握しておくべき現状に焦点を当て、国、自治体、民間の支援組織の取り組みを紹介する。



● 文・写真 西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

たにもと あい
谷本 愛さん
 香川県東讃保健福祉事務所 保健対策課

〇しから一念発起して保健師に

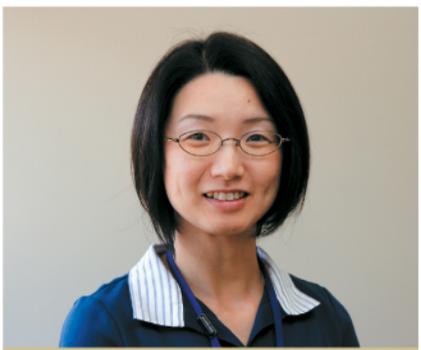
回り道を経て天職に就く



事務所近くの津田の松原にて。海風がとても気持ちいい

ひよこ保健師シリーズは基本的に3年以内の新人さんにスポットを当てている。多くは社会人としてもまだ日が浅く、専門職としての葛藤はもちろん、働くことの難しさ、楽しさも手探りの人が多い。しかし今回ご紹介するひよこさんはちよつと違う。一般企業で〇し経験を積んだ異色の存在だとい

う。



笑顔がやわらかいので、とても話をしやすい

高松空港から車で移動すること45分。途中、朝食代わりにたつた100円（激安！）のさぬきうどんをすずり、讃岐平野に広がるお椀を伏せたような形の山を眺めながら走っていくと、さぬき市にある香川県大川合同庁舎に到着した。

迎えてくれたのは東讃保健福祉事務所保健対策課の谷本愛さんだ。姿勢の良さと柔らかな物腰が印象的な人で、行政保健師になり3年目の36歳。前述のように一般企業での経験が長かったため遅咲きのデビューとなったようだ。

谷本さんの生まれは地元香川県の高松市。子どものころは保母さんに憧れていたという。

「いろいろなものが機械化し、人間でなくてもできる仕事が増えてきていたけれど、保母さんだけは人がやるべき仕事であると思っていたのです。自分も両親が共働きだったので1歳のころから保育園に行き、とてもかわいがっ



保母さんに憧れていた子ども時代

でもらったというのかもしれない「す」

子どもながらしつかりした理由を持っていたようだ。また、昔からきれいなものが好きだったそう、小3からクラシックバレエを（今も）続け、中学校のクラブ活動は器械体操部に所属していた。



就職氷河期に

高校は地元の進学校に進んだ。クラブ活動はしていなかったがクラシックバレエは週に4回以上のレッスンを受